

良寛の詩歌

——貞心尼編『はちすの露』の和歌を中心に——

長 沼 佐 智

〔抄 録〕

良寛の詩歌の中で和歌を取り上げる。良寛が最晩年に島崎木村家の庵で出合った貞心尼編の『はちすの露』から唱和編に注目したい。

良寛の和歌は書や漢詩に比し評価は低かった。ひたすら和歌を学び良寛を師と呼ぶ貞心尼が唱和という形で著したことによる効

果はあったのではないか。唱和の相手は弟由之、庄屋阿部定珍等はある。しかし相馬御風は「良寛と貞心尼の関係は甚だ単純である。しかしこの作品により豊かな尊いものとなった」としている。

キーワード 良寛、貞心尼、和歌、唱和

はじめに

良寛は何時から和歌を始めたのだろうか。『定本 良寛全集 第二巻 歌集』によると初期のものとして文化九年（一八一二）の自筆歌稿『布留散東』（六一首）と推定している。理由は文化八年（一八一〇）に名主を継いだ弟由之が「家財取り上げ所払い」となったこと、友人富取之則が文化九年（一八一二）に亡くなっていることなどによる。この頃詩集『草堂集貫華』も編んでいる。稿本歌集はもう一冊ある。その『久賀美』（二六首）は木村家に移って二年後の文政十一年

（一八一八）に成立する。良寛自身が編んだ歌集はその二集である。だが晩年良寛と親交があった貞心尼が『はちすの露』を編んでいる。ここではその『はちすの露』から良寛の最晩年の作品となった貞心尼との唱和を辿り良寛の歌を知ることから始めたい。良寛の作品は本編（九四首）唱和編（三四首）である。その中二三首は貞心尼の歌と合わせての鑑賞となる。この貞心尼編の自筆歌集は良寛没後五年目の天保六年（一八三五）に成立した。

一 『はちすの露』 本篇

ア 帰郷

梅の花 老いが心を 慰めよ 昔の友は いまあらなくに

（梅の花よ、年老いた私の心の憂さを、慰めておくれ、昔の友達は亡くなって今は独りなのだから）

弟由之の記録によれば文政十二年（一八二九）

春は花 秋は千草に 戯れなむ しゑや里人 こちたかりとも^①

（春は桜の花に、秋は名もない草の花に戯れて遊ぼう。ままよ、村人の噂がうるさくわずらわしくとも）

春の夜の おぼろ月夜の ひと時を 誰が賢らに 値ひつけなむ^②

（春の朧月夜の一刻を誰が利口ぶって値段などつけたのだろう）

西行法師の墓に詣でて花を手向けて詠める

手折り来し 花の色香は 薄くとも あはれみ給へ 心ばかりは

（西行法師の墓にお詣りして、花を御供えして詠んだ歌）

（私が手折ってお供えする花は、花の色や香りが薄いけれど、法師への私の心は深いのです。その気持ちだけはお受け取り下さい）

西行の墓は何処なのかはつきりしない。良寛が西行を詠んだ歌はこれ一首だけである。

イ 隠遁生活^①

いざここに わが世は経なむ 国上のや 乙子の宮の 森の下庵^③

（さあ、私はここ国上の乙子神社の森の草庵で年を重ねていくのだ）

良寛は文化十三年（一八一六）から一〇年間五合庵を下り、ここ乙子神社草庵で過ごした。

行く秋の あはれを誰に 語らまし あかざ籠に入れて 帰る夕ぐれ

（晩秋のこの悲しみを誰に語ったらいいのだろうか。あかぎの杖を懐に入れてとほとと夕暮れのなかを帰って行くのだ）

「あかぎ籠に入れて」の解釈がしばしば問題になる。あかぎを摘んで籠に入れるのは春である。秋は丈夫なあかぎの杖である。

恋しくば たずねて来ませ あしびきの 山のもみじを
手折りがてらに

（私に逢いたいなら、訪ねてきてください。国上山の美しい紅葉をついでに手折ったりしながら）

この歌は良寛の氣に入りの歌であろうか、『布留散東』『久賀美』『木村家横巻』『その他』の中にもある。

木の葉散る 森の下屋は 聞き分かぬ 時雨する日も 時
雨せぬ日も

（森の木の葉がしきりに散り落ちる下にある庵は、落葉の音で時雨が降っているのかいないのか聞き分けることが出来ない）

同じ歌が「阿部家横巻」にある。

月よみの 光を待ちて 帰りませ 山路は栗の 毬のしげ
きに

（月の光を待つてからお帰りになつてください。山路には栗の毬が落ちていて、危いですから）

同じ歌が「阿部家横巻」にある。この横巻には「月夜みの光を待ちて帰りませ君が家路はとほからなくに」「コ、ロアラバ草の庵に泊りませ苔の衣のいと狭くとも」があることから歌を詠み合った阿部定珍を引き留めるのである。

風は清し 月はさやけし 夜もすがら をどり明かさむ
老の名残に

（風は清々しい。月は明かるい。世通し踊り明かそう老いの思い出として）

陰暦七月十五日の盂蘭盆の夜に詠んだという前書きがある。この歌は「阿部家横巻」と「木村家横巻」にもある。盆踊の場所は木村家菩提寺の境内と言われている。

杳なくて 里へも出でず なりにけり 思し召せ 山住み
の身を

（履物がなくて里へも行けなくなってしまいました。山で一人住んで居る身をどうかお考えになってください）

白雪は 幾重に積もれ 積もらねばとて たまぼこの道
踏み分けて 君が来なくに

（白い雪は幾重にも降り積もれ。積もらないからといって、積もった雪を踏み分けて、あなたが来るわけでもないのだから）

この歌は旋頭歌で、『布留散束』と五合庵の頃作られたのではないかと言われている三八一首の中にもある。

次の四首は唱和の形をとっているが、ひとまとまりとして本編にある。

冬枯れの すすき尾花を しるべにて 尋めて来にけり これも
いほりに 貞心尼

（冬枯れの景色の中を薄の花を道しるべにしてこの庵を尋ねてやって来ました）

ひさかたの 時雨の雨に そぼちつつ 来ませる君を い
かにしてまし 師

（時雨の雨に濡れながら、訪ねて来てくれたあなたをどうやっておもてなしをしたらいいものやら）

あしびきの 山の椎柴 折りたきて 君と語らむ 大和ことの葉
貞心尼

（山の燃料用の柴の小枝を折ってくべて師の君と日本の詩歌や言葉を語り合います）

いでは 尽きせざりけり あしびきの 山の椎柴 折り
尽くすとも 師

（詩歌や言葉の話は話尽きことはありません。山の椎の小枝を折り尽くして、みんなくべてしまっても）

良寛の困惑の様子に貞心尼は訪ねてきた目的を語る。良寛もその気になっているが、困惑に変わりはない。この二首は唱和編でも良いのではないかと思える。言葉の話が出ているので、唱和編から次の二句を続けておく。

声韻の事を語り給ひて

師

かりそめの 事とな思ひそ この言葉 言の葉のみと 思

ほすな君

(言葉の音韻についてお話になられて)

(この言葉の音韻はかりそめの事とは思わないでください)

五韻を

師

くさぐさの 綾織いだす 四十八文字 声と響きを 経緯
にして

(五韻を)

(さまざまな色や模様を織る綾織物のように、声という子音と響き
という母音を縦糸と横糸のように組み合わせると四十八文字になるので
す)

夕ぐれ⑤の 岡の松の木 人ならば 昔のことを 問はまし
ものを

(夕暮れの岡の松の木が人間ならば昔の話を聞いてみたいものだ)

夕ぐれ⑤の岡は燕市大河津分水路付近にある岡。今も松がある。ここ

に万元の「忘れずは道行人の手向けをもここを瀬にせよ夕暮れの岡」
の碑がある。昔のこととは万元和尚が国上寺を退職した後、五合庵で
米五合を支給されて生活していたことによる。

長らへむ ことや思ひし かくばかり 変はり果てぬる
よとは知らずて⑥

(この世に生きながらえようとは思ってもみなかった。このように
変わってしまう世の中とは知らないで)

良寛の遺墨には詞書を「三条の市にて」とするものがある。文政十
一年(一八二八)十一月二日の三条地震の際の感慨。地震の様子を
良寛は国上の庄屋阿部定珍と与板の親戚の酒屋山田杜草に手紙を出し
ている。山田家の書簡を引く

地しんは信に大変に候。野僧草庵ハ何事なく、親るい中、死人も
なく、めで度存候。

うちつけに しなばしなずて ながらへて かゝるうこめを
見るがわびしき

しかし、災難に遭時節には、災難に遭がよく候。死ぬ時節には、
死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候。かしこ。

良寛

蠟八

山田杜臯

良寛

与板

（はちの子を詠んで）

をちこちの 県司に 物申す もとの心を 忘るるなゆめ^⑦

（あちこちの地方の役人に申し上げます。本来の心高い志を決して
忘れないでください）

この歌は乙子神社草庵時代の歌にある。

ウ 隠遁生活②（長歌）

はちの子をよめる

はちの子は 愛しきものかも しきたへの 家出せしより あし
たには 腕にかけて ゆふべには 掌にのせて あらたまの 年
の緒長く 持たりしを けふよそに忘れし来れば 立つらくのた
づきも知らず をるらくの すべをも知らず かりごもの 思ひ
乱れて 夕星の か行きかく行き 谷臺の（さわたる底ひ 天雲
の）向伏すきはみ 天地の 寄り合ひの限り 杖つきも ちかず
も行きて 求めなむと思ひし時に 鉢の子はここに在りとして わ
がもとに 人は持て来ぬ いかなるや人にませかも 千早ぶる
神の告かも ぬばたまの 夜の夢かも うめしくも 持て来るも
のか その鉢の子を

（鉢の子は愛しいものだなあ。出家してから朝には腕にかけて、夕
方には掌に乗せて長い年月持っていたのを、今日は他所に忘れて来て
しまった。耐えがたい気持ちで居ても立つてもいられず、あちこち尋
ね歩き暮蛙の大地の底や大空と大地が寄り合う限りまで露を置いた野
原を探索するため杖をついてもつかなくても行つて探そうと思つていた時
に「鉢の子はここにありました」と私の所へ人が持つて来た。どのよ
うなお人なのか。神のお告げかも。夜の夢かも。嬉しいことに人が持
つて来たのだ。具合よく鉢の子を持つて来てくれたのだ）

かへしうた

道のへの すみれ摘みつつ 鉢の子を 忘れてぞ来し そ
の鉢の子を

（反歌）

（道ばたで、葦を摘んでいて置き忘れてしまった。大事なその鉢の
子を）

この歌は「木村家横巻」にある。

長うた

冬ごもり 春さりくれば 飯乞ふと 草のいほりを 立ち出でて
里にい行けば 里子ども いまを春べと たまほこの 道のちま
たに 手まりつく 我も交りて その中に 一二三四五六七 汝
がつけば 吾がうたひ 吾が歌えば 汝はつく つきて歌いて
霞立つ 永き春日を 暮らしつるかも

(長歌)

(冬籠りから解放されて、春になったので托鉢に回ろうと草庵を出て村里に行くと、子供たちが春の真っ盛りと道の辻で手毬をついている。その中に私も交って一二三四五六七と子供がつけば私が歌い、私が歌えば子供はつく。ついて歌って長い春の一日を過ごしたのだ)

かへしうた

霞立つ 永き春日を 子どもらと 手まりつきつつ この
日暮らしつ

(反歌)

(長い春の日を子供たちと手毬をつきながらいつまでも過ごしていた)

宵々に 霜は降れども よしゑやし 明くれば融けぬ 年の端に
雪は降れども よしゑやし 日に消えぬ しかすがに 人のかし
らに 降りつめば 積みこそまされ あらたまの年は経れども
消えずぞありける

(宵ごとに霜は降りるけれども、それはどうあろうとも、夜が明ければ融けてしまう。

毎年雪は降るけれど、それがどうあろうとも、春の日に消えてしま
う。そう言うものの、人の頭に降り積もれば、どんどん積み重なり
年月が経過しても、消えないでそのままなのだ)

この歌は「木村家横巻」にある。

かへしうた

白雪は 降ればかつ消ぬ しかあれど かしらに降れば
きえずぞありける

(反歌)

(白い雪は降ったり消えたりする。そう言っても人の頭に降った白
いものは消えないものだ)

この歌は自筆稿『布留散東』『木村家横巻』にある。

天保元年五月『大風の吹きし時の御歌』

わが宿の 垣根に植えし 秋萩や 一本すすき をみなへし 紫
苑撫子 藤ばかま鬼の醜草 抜き捨てて 水を運びて 日覆ひし
て 育てしからに たまぼこの 道もなきまで はびこりぬ 朝
な夕なに 行きもどり そこを出で立ち 立ちゐて 秋を待ち遠
に 思ひしに 時こそあれ 皐月の月の 二十日まり 四日のゆ
うべの 大風のきほひて吹けば あらがねの 土にのべ伏し ひ
さかたの天に乱りて ももちぢになりにしぬれば門鎖して 足ず
りしつつ 寝ねぞしにける いともすべなみ

（私の家の垣根に添って植えた萩や、一株の薄、女郎花、紫苑、撫子、藤袴、鬼の醜草のように根強い雑草を抜き捨て、水を運んで日よけをして育てたから、道がなくなるほど蔓延った。そこで、朝な夕なに行き来してそこに立って秋が来るのを待ちどうしく思っていたその時、五月二十四日の夕方に大風が勢い良く吹いたので植えた草は土の上に倒れ伏しまたは乱れ飛んでしまったので、戸を閉めて足踏みをする思いのまま寝ることにした。どうすることもできないので）

かへしうた

手もすまに 植ゑて育てし 八千草は 風の心に まかせ
たりけり⁽⁸⁾

（手を休めることなく、植えて育てた数多の草は風の思うままにまかせておいたのであった）

この歌は、「木村家横巻」にある。

あしびきの 国上の山の 冬ごもり ひにひに雪の 降るなべに
往き来の道の あとと絶え ふるさと人の 音もなし うき世を
ここに 門鎖して 飛驒の工が うつ縄の ただ一筋の 岩清水
そを命にて あらたまの 今年のけふも 暮らしつるかも

（国上山の麓で冬籠りをしているが、毎日雪が降るにつれ、行き来の人の足跡も見えなくなり、人の訪れもない。門を閉ざして飛驒の工の引く墨縄のように只真っ直ぐに岩を落ちる清水を命として今年の今日を過ごしたのであった）

かへしうた

小夜ふけて 岩間の瀧津 音せぬは 高嶺のみ雪 降り積
もるらし⁽⁹⁾

（反歌）

（夜が更けて岩の間から落ちる瀧の音がしないのは、山の高い所に雪が降り積もっているからであろう）

二、唱和編

貞心尼が良寛を初めて訪問した時、良寛は留守であった。

師常に手まりをもて遊び給ふとききて奉るとて

これぞこの 仏の道に 遊びつつ つきや尽きせむ 御法なるらむ

（良寛師はいつも手毬を以て遊はれると聞いて手毬と歌を差し上げようと思ひ）

（これが仏の道に遊びながらついても尽きない仏法なのですね）

御かへし

師

つきてみよ 一二三四五六七八 九の十 十とをさめてまたはしまるを

（御返歌）

（まりをついてみてください。一二三四五六七八九十と、十で終わり、また一から始まるくり返しに仏の教えが込められています）

良寛の返事を貰って二人は会うことになった。

はじめてあい見奉りて

貞心尼

君にかく あい見ることの 嬉しさも まだ覚めやらぬ 夢かとぞ思ふ

（はじめてお目にかかつて）

（師の君にこのようにしてお目にかかり、嬉しくてまだ覚めない夢のような気持です）

御かへし

師

夢の世に かつまどろみて 夢をまた 語るも夢も それがまにまに

（御返歌）

（夢のようなこの世でうとうと眠っている間に夢を見てその夢を語ったり夢をみたりするのも、成り行きにまかせましょう）

こうして二人の出会い文政十年（一八二七）ころの良寛と貞心尼の
初対面の歌に始まる。

いざ帰りなむとて

貞心尼

立ち帰り またも訪ひ来るむ たまぼこの 道の芝草 たどり
たどりに

（それではお暇いたします。と言って）

（折り返しましたお訪ねいたしました。道の芝草をたどりながら）

ほどをへてみ消息給はりけるなかに

師

君や忘る 道やかくるる このごろは 待てど暮らせど
音づれのなき

（しばらくして、師の君がお手紙をくださったなかに）

（あなたが私のことを忘れたのか、草のために道が隠れてしまった
のか、このごろはあなたのことばかり待って日を過ごしているのに、
何の知らせもないことだ）

御かへし奉るとて

貞心尼

こは人の庵に有りし時なり

ことしげき 葎の庵に 閉じられて 身をば心に まかせざり
けり

（御返歌をさしあげて）

（これは柏崎の人の庵にいた時のもの）

（約束通りにお訪ねする予定でしたが、多忙な草庵に閉じ込めら
れ、師の君のことが心にありましたのに体は心のようにはいかないの
です）

山の端の 月はさやかに 照らせども まだ晴れやらぬ 峰の
うす雲

（山の稜線に月は煌々と照らしていますが、峰のうす雲はまだ晴れ
ておりません）

御かへし

師

身を捨てて 世を救う人も ますものを 草のいほりに
閑求むとは

（御返歌）

（わが身を捨てて世の人を救う方もおられるというのに、草庵にこもったままだ時を過ごししていいのだろうか）

ひさかたの 月の光の 清ければ 照らしぬきけり 唐も
大和も むかしもいま うそもまことも

（月の光が澄みきつていて中国も日本も過去も現在も虚も実もすべて平等に照らしつづけている）

春の初めつ方消息奉るとて

貞心尼

おのづから冬の日かずの 暮れ行けば 待つともなきに 春は
来にけり

（春の初めごろ師の君に手紙を差し上げて）

（冬の日数も自然と過ぎて行つたので待つてゐるわけでもないのに、いつのまにか春がやってきました）

さめぬれば 闇も光も なかりけり 夢路を照らす 有明の月

（目が覚めれば闇も光もないのです。夢の中で通つて来た道を有明の月が照らしています）

御かへし

師

天が下に 満つるたまより 黄金より 春の初めの 君が
おとずれ

（御返歌）

（この世の中に沢山ある宝石やお金よりも春の初めに届いた手紙、そして訪ねて来て下さることです）

御かへし

貞心尼

春風に み山の雪は 融けぬれど 岩間によどむ 谷川の水

（御返歌）

（春風に奥山の雪は融けてしまったけれど、谷川の水は岩の間に淀んだままです）

御かへし

師

み山べの み雪解けなば 谷川によどめるみずはあらじと
ぞ思ふ

（御返歌）

（山に積もった雪がとけたならば谷川によどんでいる水はないと思
う）

御かへし

貞心尼

君なくば 千たび百たび 数ふとも十つつ十を百と知らじを

（御返歌）

（師の君がおられなかったら、百回千回と数えても、十ずつ十が百
とはわからなかったでしょう）

御かへし

師

いざさらば 我もやみなむ 九のまり 十ずつ十を 百と
知りせば

（御返歌）

（さあ私もここで終わりにしましょう。九つの次の十が十ずつで百
だとわかったならば）

秋萩の 花咲くころは 来て見ませ 命またくばともにか
ざさむ

（御返歌）

（秋になって萩の花が咲くころに、私の庵を訪ねて下さい。私が元
気でしたら一緒に萩に花をかざして楽しみましょう）

されど其ほども待たず又とひ奉りて

（けれど、師の君のおっしゃったころまでは待たないで、ま
たもやお訪ねして）

秋萩の花咲くころを待ちどほみ夏草わけて又も来にけり

（秋萩の花がさくころまでは待ちどうしく、夏草が生い茂っている
のを分けて、またお訪ねしました）

御かへし

師

秋萩の 咲くを遠みと 夏草の 露を分けわけ 訪ひし君
はも

(御返歌)

(秋萩の 花の咲くのが待ちどうしいのでと、露のおりた夏草を分
けながら私の庵へおいでになったのですね)

あくる日はとく訪ひ来給ひければ

貞心尼

歌や詠まむ 手まりやつかん 野にや出む 君がまにまに なし
てあそばむ

(翌日師の君は朝早く訪ねていらっしやったので)

(歌を詠みましょうか。手まりをつきましょうか。野原に出てみま
しょうか。師の君におまかせして、遊びましょう)

御かへし

歌や詠まむ 手まりやつかむ 野にや出む 心ひとつを
定めかねつも

(御返歌)

(歌も詠みたいし、手まりもつきたいし、野原に出て遊びたいし、
目移りしてきめられない)

秋は必ずおのが庵を訪ふべしとちぎり給ひしが 心地例ならね
ば しばしためらひてなど御消息給はりける中に

秋萩の 花のさかりは 過ぎにけり 契りしことも まだ
とげなくに

(秋になったら必ず私の庵を訪ねますと約束なさったのに師の君は
体の調子がよくなく、少しの間静養しますなどとお手紙を頂いた中に)

(秋萩の花の盛りは過ぎてしまいました。お訪ねする約束も果たし
ていないのに)

あずさ弓 春になりなば 草の庵を とく出て来ませ 逢
ひたきものを

(春になったら庵を出て早く私の所へ来てください。逢いたいの
です)

いついつと 待ちにし人は 来りけり いまは相見て 何か思はむ

（いつ来るか、いつ来るかと待っていた人は来てくれました。今はお互いの顔を見ることが出来て、もう何も思うことはありません）

もう一首詠んで良寛の和歌は終わりとなった。その後貞心尼が歌で呼びかけても歌は返って来なかったのである。

良寛の歌について研究者はどう鑑賞するか。良寛の和歌は万葉調、古今調、新古今調いや良寛調と様々である。井本農一は『良寛』（講談社学術文庫一九九六）で「鉢の子」の歌は「良寛らしい味のあるおもしろい歌」としながらも、

良寛という人を背景にしなければそのおもしろみがわからない歌であり、歌としては、それだけでは独立性の乏しい現実性を欠いた歌である。

として「うたもよまむてまりもつかむ野にもむこゝろひとつをさだめかねつも」の歌は貞心尼と良寛の関係を知り良寛への呼びかけの歌を知らなければわからないとする。そのまま全く違った取り方もあってもいいのではないか。

確かに「うたもよまむ……」は貞心尼との唱和である。相馬御風は「何と云うあたたかさであろう」と評している。（大愚『良寛』）これは両者の歌、特に貞心尼の歌を指している。また石田吉貞は（『良

寛―その原像と全貌』の中で西行的、隠遁美があるとして内容が素朴であること、むすびの「さだめかねつも」が万葉調に似ているが、句切れが多いことから新古今調であるとしている。『はちすの露』に出て来る最晩年の歌これも唱和の歌であるが「あきはぎの・・・」や「いついつと……」も古今調が自然に出ていと評している。貞心尼との唱和の歌ではあるが、ここでは良寛の歌を批評しているのであるからその視点から良寛の歌を見るべきであると思う。良寛の詩歌について石田氏の『良寛』をはじめ諸氏の批判の声から再考したい。

おわりに

良寛の作品では和歌から良寛を知るのが一番と思いつく中でも唱和の歌、唱和では貞心尼の『はちすの露』と違って始めた。すると漢詩、（詩経、離騷など）和歌（万葉集、古今集、新古今集）俳句（芭蕉、一茶）などが見られる。それらが良寛を語るすべてであるので作品を通して知るしかない。良寛の世界は次のように見えてくる。作品の中の良寛ではあるが、まず大きな詩の世界があつて、その中には俗謡もある。その中から自由に作つて来たのではないか。和歌はその中でもなじみやすかつたのではないか。

『はちすの露』のその後の貞心尼の歌への返歌は「うらを見せ おもてを見せて 散るもみじ」と和歌ではなく俳句であつた。「これは良寛の句ではないけれどもおりにかなつて口ずさまれ、尊い」と貞心尼は記している。この後に良寛の口づさんだ句として八句記録されている。良寛は俳句を作っていないが、貞心尼との話の中に芭蕉、父以

南の句もあつたのではないか、良寛が口にした言葉が存疑句の俳句が残されている。

〔注〕

- (1) 春は花秋は紅葉とちりはててたちかくるべきこのもともなし（『拾遺和歌集』巻二〇―一三一 哀傷）
- (2) 「春宵一刻値千金、花有清香月有陰」（蘇軾）
「てもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月よにしく物ぞなき」（『新古今和歌集』巻一―五五）
- (3) いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもおし（『古今和歌集』巻一―八九 八二）
- (4) このはちるやどはききわくことぞなきしぐれするよしぐれせぬよも（『後拾遺和歌集』巻六―三八 二二）
- (5) 住吉の岸のひめ松人ならばいく世かへしとはましものを（『古今和歌集』巻十七―九〇 六）
- (6) 存らへてつひに住むべき都かはまぼろしのゆめを現に見る人は目も合はせてや夜を明かすらむ（『山家集』下）
- (7) うちわたすをち方人に物申すわれそのそこに白くさけるはなにのほなぞも」（『古今和歌集』巻十九―一〇〇 七 旋頭歌）
- (8) 手母須麻尔 殖之芽子尔也 還者 雖見不飽 情将尽 てもすまにうゑしはぎにや かへりては みれどもあかず こころつくさむ（『万葉集』巻八―一六 三三 秋相聞）
- (9) おくやまのいはまのたぎつわきかへりおとにや人をききてやみなん（『続後撰和歌集』巻一―一六 四一）
- (10) 「生き死にの 境離れて 住む身にも さらぬ別れの あるぞ悲しき」貞心尼
- (11) 谷木因の「裏ちりつ表を散りつ紅葉かな」と言われている。

（ながぬま さち 文学研究科国文学専攻博士後期課程）

（指導教員・黒田 彰 教授）

二〇一五年九月三十日受理